HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	室橋, 春光
Citation	子ども発達臨床研究, 5
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54974
Type	other
File Information	AA12203623_5_01.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻頭言

本センターの基盤は、1978 年、発達心理学講座の三宅和夫教授が奔走されて設置されることになった教育学部の附属教育研究施設である「乳幼児発達臨床センター」である。当時は 1 階部分に、縦断的発達研究を行い、保育に関わる実習・実験を行うための施設として幼児園が設定されていた。三宅先生を中心とする発達心理学講座は、縦断研究のメッカとして全国から注目されていた。三宅先生の共同研究者でもあったアメリカの著名な発達心理学者 J. Kagan も、本センターを訪れて講演を行っている。

このように、発達心理学研究を中心に展開してきた本センターは、2006 年に教育学研究科附属の「子ども発達臨床研究センター」として新たに出発することになった。これは教育学研究科の附属教育研究施設として、より広い視野で教育科学の展開を目指すため、乳幼児期だけでなく児童/青年期も含めた社会との関わりにおける具体的な教育的事象としての「発達」を、またその臨床的実態を解明しようとする姿勢を示そうとするものであった。そのため、センターに「子ども臨床研究部門」「子ども発達研究部門」「子ども支援研究部門」の 3 部門をおき、主にこの 3 つの領域で研究を進めることとした（なお 2007 年からは、教育学研究院の附属施設となっている）。

そして、「乳幼児発達臨床センター」の発足以来刊行されてきた紀要は、「子ども発達臨床研究センター」の紀要として新たに「子ども発達臨床研究」と名付けられ、再出発した。創刊号では、「研究センターとしての再構築」（青木、2007）を目指して行われたシンポジウム「現代社会における子どもたちの〝生きづらさ〟を考える」における話題提供者の報告が掲載された。第 2 号からは、田中康雄教授を中心として 5 年間にわたり展開された「軽度発達障害児・者に対する生涯発達支援プログラムの開発」をテーマとした事業に関する研究成果、本センターにおいて 2001 年から行われている「北大土曜教室」に関する諸論文、地域生活支援に関する諸論文などが掲載されてきた。

諸事情から 2010 年の第 4 号で本誌の刊行が休止していたが、この間に学部を挙げてセンターを中心に大型研究に取り組むための体制づくりについて検討が進められた。様々な研究領域の教員で組織された研究プラットフォーム委員会でなされた議論は、「発達」と「支援」をキーワードとして「実践」を総体的に把握し、従来のアプローチから一歩進んだ領域横断的な分析を行うというアイデアを生み出していった。そして、現場で働く様々な領域の実践者においでいただき、現場の悩みを語っていただきつつその内容を整理していく、という「困りごとワークショップ」の開催につながった。また同時に、「遊ぶ・学ぶ・働く ── 持続可能な発達の支援のために ──」（2011 年）、「『生きづらさ』を超えて」（2012 年）と題したシンポジウムを開催してきた。このような取り組みは、「発達支援学」という新しい領域を創り出していこうとする流れになりつつある。

教育学研究院におけるセンターの役割をより明確に、より活発に展開していく証として、本年度より「子ども発達臨床研究」の発刊を再開することになった。本号では、発達とその臨床に関わる諸テーマで、地域との関わりも含めて行われた研究成果を掲載している。

今後さらに発刊されていく「子ども発達臨床研究」では、本センターの役割のひとつとして実施していく様々なシンポジウムやセミナーなどの報告も含めて、子どもの発達のありさまを様々な教育的事象の中に探りつつ、その背景にある社会の本質的メカニズムをみていこうとする、私たち教育学研究院の研究姿勢を学内外に示していくことができるものと期待している。

（センター長　室橋春光）